vol.21

選書者：志水 達也

（神戸市立中央図書館 館長）

●『タテ社会の人間関係』

著者：中根千枝

日本を代表する社会人類学者であり、東京大学初の女性教授として学術界を切り拓いた先駆者が著したロングセラーです。約 60 年も前に書かれたとは思えないほど、現代にも通じる日本社会における人間関係の本質を鋭く分析しています。私たちが組織の中で無意識に行っている振る舞いを具体的なエピソードで鮮やかに切り取りながら、「資格（属性）」と「場」、「ウチ」と「ヨソ」の概念など、思わず納得する論考が盛りだくさん。すべてのビジネスパーソンが読むべき必読の一冊です。

●『できそこないの男たち』

著者：福岡伸一

刺激的なタイトルですが、分子生物学の門外漢でも一気に引き込まれる仕掛けが満載で、生命の仕組みを DNA やタンパク質レベルで優しく解き明かします。
科学の専門書でありながら、誌的な比喩、情熱的なストーリーテリング、そして人間の生き方への深い洞察が見事に融合しています。福岡伸一氏ならではのドラマチックな語り口が心地よく、読み終えたあと思わず誰かに伝えたくなる傑作です。
本書が面白かった人は、同著者の『生物と無生物のあいだ』も読んでみてはいかがでしょうか。

●『うらおもて人生録』

著者：色川武大

「雀聖（じゃんせい）」と呼ばれ、裏社会の修羅場をくぐり抜けてきた非行の天才が贈る、劣等生のための人生論。エリート街道を外れた少年時代、独自の生き残り戦略、そして命がけの現場で培った「人間観察眼」―。本書は、自身の泥臭く不格好な体験をもとに、過酷な社会を生き抜くための“魂の技術”を説いたエッセイです。底知れぬ優しさと愛情に満ちた言葉の数々は、これからの未来に悩む若い人にこそ深く刺さるはず。迷ったときに背中を押してくれる、一生モノのバイブルです。

●『なぎさホテル』
著者：伊集院 静

人生のどん底であてもなく行き着いた海沿いのホテルを舞台に、作家としての原点と苦悩に満ちた青春時代を回想した自伝的小説。
舞台となる「逗子なぎさホテル」は、大正末期に開業し昭和の終わりとともにその役割を終えた、神奈川県の逗子海岸沿いに実在した木造 2 階建ての美しいクラシックホテルです。ページを繰るうちに、いつしか心地よい潮風の香りが漂い、往時のホテルの輪郭が夕闇の向こうに切なく浮かび上がります。今はもう訪れることができないのが、いっそう儚く、そして愛おしい名著です。

●『1980 年の松田聖子』
著者：石田伸也

昨年の紅白歌合戦の姿を見て、ある記憶が蘇った。
時は 1980 年（昭和 55 年）。坊主頭で暗くなるまで泥だらけになり、白い球を追いかけていた少年時代。そんな私たちの前に、まるで遠い星の国からの贈りもののように、小さな光のフェアリーが舞い降りた。風のそよぎのような心地よさ、花が開くような色鮮やかさ。
息をのむほど煌びやかな時間を、あのひとはお茶の間に届けてくれた。
あれから 46 年が経った今もなお、輝きながら走り続ける不世出のスターです。